

不登校生徒のためのグループ・アプローチ*

——第1報・'94ヨコ体験グループ」のまとめ——

池田 豊應・山下 礼¹⁾

I. はじめに

執筆者のひとり池田は、臨床活動の一環として数年前から「ヨコ体験グループ」と称する合宿を中心とした不登校生徒のためのグループ・アプローチを前任の名古屋大学教育学部において行ってきた。これは現在も継続されているが、それとは別に、池田が平成6年に赴任した本学においても、学生の熱心な要望に応じて、同様の活動を実施することになった。これは本稿執筆の現時点では、すでに2年目を迎えて制度的にもさまざまな展開を示しているが、本稿は「第一報」として、平成6年度1年間の活動をまとめ、報告することにした。

臨床実践は「それを振り返り記載すること」によって、つまり言語化し対象化し反省することによって、次なる実践への展望を得、それを深化させ、また高めることになる。これが即、臨床的研究ということであり、その伝達が教育である。かくして「実践」と「研究」と「教育」の三位一体は、このような「振り返り」によって実施される。

今日、不登校問題への接近は多様化しており、かつてのように、精神科における「治療モデル」や相談室での「相談モデル」はもはや中核ではなくなった。とくに私塾や自由空間、半教育場面的な中間施設や「新しい学校づくり」等々、「生活モデル」あるいは「コミュニティ・モデル」と呼んでよいような支援

形態が目立つようになってきた。

これは明らかに、不登校を特別な「疾病」と見るよりは、「発達」上の問題と考える見方が一般化してきたことの反映である。こうした支援形態は、彼らをただちに学校に戻すことを直接の目標とするよりも、彼ら自身の生活体験を充実させることで精神的成長を促そうとしており、また多くが「集団接近」的特徴を有している。

われわれの接近も同様であるが、われわれはこれをとくに「人間のかかわりモデル」と呼んでいる。というのは、彼らの「発達上の問題」とは、タテ方向（「個別化」）とヨコ方向（「社会化」）の発達が不均衡であることにあり、その回復を促し、人間的成熟をはかるためには、人と人との「出会い」が重要だと考えるからである。

そのような人間的出会いが効果的に成立するために設定された場が合宿である。もちろん個人心理療法においても、人間的出会いの要因は不可欠ではあるが、不登校生徒の中核である中学生・高校生という発達段階にある者に対して、既成の心理療法の形態を適用することはなかなか難しいことが多い。遊戯療法を行うのには年長すぎるし、カウンセリングは言語化の苦手な彼らには継続が困難である。構成的集団療法では参加動機が高まらない。

そこへゆくと、合宿ではいろいろ楽しげなプログラムが組まれているので、当面はそれ

をこなせばよいという点で参加しやすい。その実際のねらいは、さまざまな人間関係の成立である。スタッフの人数が多く、いろいろな性格やタイプの学生がいることが、出会いの多様性を保証する。スタッフの人数は原則的に、参加生徒と約同数が望ましい。

このような合宿はまた、人間関係学を学ぶ大学生にとっては、生きた人間関係を直接、経験できる貴重な実践的教育の機会となる。

「合宿療法」という言葉は、「キャンピング・セラピー」の用語に倣った新造語であるが、短期間の合宿の中の体験だけにすべてが賭けられているわけではない。名古屋大学グループで確立されてきた進め方は、3月末の3泊の春合宿からはじめて、月1回の定例会と季節ごとの1泊の合宿を通して、翌年の春合宿でメンバーの更新をするという年単位の活動形態をとっている。定例会のほかにも、活動の企画や準備、会誌づくりなどのための下位グループの集まりが開かれる。

II. 「ヨコ体験グループ」の目的

不登校の生徒たちにおける発達の不均衡を回復させ、人間的成熟を促す契機となるのは、人と人との全体的で深いかかわりである。この「人間的成熟」と「人間のかかわり」の関係という主題は、きわめて普遍的であるから、それが問題となるのは生徒たちばかりではなく、スタッフの大学生にとっても、教職員にとっても、同じである。この点では、参加者は皆、同じ土俵に立っているわけである。

ここでは生徒たちに焦点を当てておけば、要するに、集団に受け入れられ、気の合う仲間や信頼できる人との関係ができてはじめて、率直に本音で思いのたけを語る事が可能となる。そこで起こるもっとも重要な心理的過程は、「共感的確認」(consensual validation)ということである。それは自分も他者も基本的には「同じ人間である」ということの実験であり、人と共通の基盤の上に立つということである。実は、これがわれわれのグループ

名「ヨコ体験」の真の意味である。こうして人と同じ共通の基盤に立ち上ること、自己と他者が対等の等身大の存在になりうるということが、そのまま一人前の人間として一人立ちするという事、つまり「自立」につながるのである。さらに「イニシエーション」(大人になる儀礼)に通ずる心理的意味や、新しい人間関係がそれまでの限定された「対象関係」のパターンを変えることの意味も大きい。

以上のような経験が指し示しているのは、「新たな自己の創造」だといってよい。このようなかかわりをひとつのグループとして行うことで、このプロセスが促進され、また心理療法の専門家の監督下であることにおいて種々の危険性が避けられる。合宿のプログラムを彩る火も水も星も夜も含めて、この機会はこの新たな自己との出会いのための絶好の舞台となるのである。

オウム真理教の事件が明らかになり出した時に驚いたのは、彼らの集団とわれわれのグループが狙いとしているところに、ある種の共通性があることであった。たとえば、さきに使った「イニシエーション」という言葉もそうであるが、出生家族を離れて合宿生活をするという「出家」の意味、呼ばれたい愛称(オウムではホーリィネーム)をつけてそれになるという一種の変身ないしは理想自己の経験、家族的雰囲気をもったタテとヨコの緊密な心理的関係、等々は、すでに数年前に私がわれわれのグループを企画した時に言語化しておいたものであった。もちろん、オウムの犯罪性の面はまったく問題外であるが、この狂気の団体がある面で集団心理療法的雰囲気を備えていたということは、現代の若者がこうした条件を必要としていることを物語っている。

しかしながら、現代の中・高生徒たちの自己経験を拡張し、精神的自立を促すための条件は新興宗教の団体においてよりもまずは、教育の場に、そして家庭に求められるべきである。そのための示唆を今日さしあたり提供できるのは心理学、とりわけ「心理療法学」

(カウンセリング・サイコロジー)である。今後、われわれは具体的な経験に基づいて積極的に、このような提案を行っていかねばならないと考えるが、今の段階では少なくとも、われわれが提供できるのは、この「ヨコ体験グループ」である。

Ⅲ. 「'94ヨコ体験グループ」の計画

「'94ヨコ体験グループ」は、東海女子大学池田研究室と「21世紀の学校づくりを考える会」との共催で、不登校の生徒のための合宿療法として、不登校中および不登校傾向にある中・高校生を対象に、3泊4日の夏合宿からはじめられた。夏合宿後は、月1回の定例会を継続し、3月の1泊2日の春合宿を最後に終結した。

スタッフは東海女子大学の教職員、東海女子大学の大学生(2・3・4年生)、他大学の大学生、「21世紀の学校づくりを考える会」の高校教員の混合チームであった。スタッフは夏合宿に先立ち、7回のミーティングと3回の事前学習会を開き、合宿の日程の検討、合宿の運営の検討、不登校生徒の心理、合宿療法、集団療法に関する学習やスタッフとしての役割などについて話し合い、夏合宿にのぞんだ。

夏合宿は「ヨコ体験グループ合宿in藤橋村」と称して、1994年8月28日～8月31日までの3泊4日を岐阜県揖斐郡藤橋村にある「星の家」という施設を利用して実施された。

定例会での活動内容は表1で示したとおりで、夏合宿後の再会ミーティングを含め、5回行った。

春合宿は「ヨコ体験グループ合宿in伊良湖&南知多」と称して、1995年3月21日～3月22日までの1泊2日を愛知県渥美郡渥美町にある「すなば」という民宿を利用して実施し、この春合宿にて「'94ヨコ体験グループ」は終了した。

表1 主な活動内容

8月	夏合宿(3泊4日)
10月	再会ミーティング
11月	第1回定例会/遊園地
12月	第2回定例会/クリスマス会
1月	第3回定例会/水族館
2月	第4回定例会/ボーリング大会
3月	春合宿(1泊2日)

1. スタッフの役割と班の構成

この活動の目的のひとつである、大学生の心理臨床の訓練の場として、大学生は不登校生徒に関する知識や理解、病理などの勉強から初め、彼らとかわるための技法論などについての事前学習や、ミーティングを重ねた。3つのテーマ(①「カウンセリング治療者の態度」、②「遊戯治療」、③「エンカウンターグループ」と「集団精神療法」)について3回の学習会とまた、合宿準備や活動の運営などについての話し合いを7回おこない、合計10回のスタッフミーティングをおこなった。スタッフは基本的に受容的な姿勢でメンバー同士の「ヨコ」のつながりを持たせていくよう機能することが期待された。教職員は、運営事務・カウンセラー・スーパーバイザーの役割を取り、活動中における大学生のスタッフやメンバーを見守る外枠となった。

各班の編成は表2に示したとおりであるが、班の構成は、メンバーとスタッフ混合で、1班は「男子グループ」、2班は「高校生女子グループ」、3班と4班は「中学生女子グループ」であった。メンバーとスタッフは呼ばれたい愛称をつけた。

2. メンバーの募集と事前面接

メンバーの募集については、岐阜県・愛知県の中学校160校、高校73校、相談機関40機関、合計273施設に合宿の案内のピラ、ポスター、しおりを郵送配布し、また同時に新聞やラジオでも案内をした。受付窓口は、東海女子大学・心理教育相談室と「21世紀の学校づくりを考える会」の2カ所に設置して、電話での申し込みを受け付け、事前面接の日取り

不登校生徒のためのグループ・アプローチ

を予約した。

事前面接は、本人と保護者に行い保護者には本人の現在の様子、不登校の原因、生育歴、教育歴、家族関係、合宿についての注意事項などについて聞き、本人には合宿の日程の説明、合宿への期待、不安について尋ねた後、合宿当日の緊張感を感じさせないために数人のスタッフと交流する機会を持った。この事

前面接を行うことによって、スタッフが合宿でのメンバーとのかかわり方やメンバーの人間関係の持ち方についての見通しを持つことができるようになり、メンバーへの対応がしやすくなると同時にメンバー自身にとっても不安や緊張を軽減することもできるようになった。

表2 班の構成とスタッフとメンバーの愛称

	メンバー	スタッフ
1班 (10名)	ブロッキー (中2男) マック (高1男) のりくん (高1男) (3名)	加ト吉 (教員)・やまち (短大2女) チャールズ (記者)・ながいも (大2女) ハッシー (教員)・セバスチャン (大2女) のぶちゃん (大4女) (7名)
2班 (9名)	モロヘイヤ (高1女) ピコリン (高2女) 智世 (高2女) ユーグレナ (高3女) (4名)	おやぶん (教員)・なおなお (大2女) かんちゃん (大3女)・うらら (大2女) ペンギン (大2女) (5名)
3班 (9名)	クララ (中1女) ヒロコ (中2女) ちーちゃん (中2女) (3名)	きたぬき (教員)・サヤ (大3女) ジュピター (大4女)・こくみ (大3女) トッポジージョ (大4女) くまちゃん (大3女) (6名)
4班 (10名)	ハイジ (中2女) かほちゃん (中2女) みやちゃん (中3女) (3名)	おかあさん (教員)・リョーさん (職員) ひらりん (教員)・ウーフ (大3女) きらら (職員)・ナンシー (大3女) アラレちゃん (大4女) (7名)

3. 夏合宿の日程について

合宿の日程は、図1に示した通りである。

第1日目は、スタッフが主導性を取り、出合いのゲームやキャンプ・ファイヤー等を行うことでメンバーとの楽しい雰囲気作りが成される。これらはメンバーの対人緊張や集団参加への抵抗を軽減させ、リラックスさせることが目的であるが、第2日目からは次第に非構成的になっていく。これはメンバーの主体性や自主性がより発揮させるようになることが目指されているからである。また、集団に馴染めないメンバーや、体調の不調を訴えるメンバーに対しては、その時々のメンバーの感情をスタッフが受けとめ、メンバー自身のペースを守りながらかかわっていくことに

留意された。

第3日目からは、メンバーの行動化が出現しやすいことから、メンバーの意志を尊重をしてメンバーと共に行動しながらもスタッフはより客観的に観察する態度が要求される。

第4日目の最終日は、作文やふりかえりの会などの構成化されたプログラムが再び組まれている。これは合宿で過ごした「非日常的世界」から、合宿前の自分のいた場所への帰還を促すためである。

池田豊應・山下礼

8月28日(日)

6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
			集 合	移 動	昼 食	テ ー リ ン グ		ゲ ム	出 会 い の		休 部 屋 割 り 憩 り	夕 食	フ ァ イ ヤ ー	花 火 大 会	入 浴 ・ 自 由	就 寝	

8月29日(月)

6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
		起 床 ・ 洗 面	朝 食									夕 食	入 浴 ・ 自 由	星 の 観 察	自 由	就 寝	

8月30日(火)

6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
		起 床 ・ 洗 面	朝 食								キ バ ユ ー ー ベ	入 浴 ・ 自 由	肝 試 し 大 会		就 寝		

8月31日(水)

6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
		起 床 ・ 洗 面	朝 食	掃 片 付 け 除	の ふ り か え り 会 り	昼 食	色 紙 の 交 換	移 動	解 散								

図1 夏合宿の日程

4. 定例会の活動と終結方法

定例会は夏合宿終了後、月に一度、合宿に参加したメンバーとスタッフが集う場として設けられた。この定例会では、合宿での非日常的世界とは別に、日常に近い状況で同じメ

ンバーやスタッフと再会し、メンバーにとって守られた、居心地の良い関係の中で相互関係を維持し発展させていくことをねらいとして行われる。また、先でも述べたとおり、このグループは翌年の春に終了するため、定例

3月21日(火)

6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
			集 合	移 動	昼 食	い ち ご 狩				ア ス レ チ ッ ク	移 動	(旅 館 割 り 着) 旅 館 到 着	夕 食	入 浴	自 由	就 寝	

3月22日(水)

6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
		起 床 ・ 洗 面	朝 食	卒 業 式	昼 食	自 由	旅 館 出 発	移 動	解 散								

図2 春合宿の日程

会活動の最後には春合宿を設け、卒業式という形をとる。一年を周期に活動が終結することで、「出会い」と「別れ」を経験し、限られた時間内での自己表現や成すべきことを考える、いわば訓練的な意味が含まれている。

5. 春合宿の日程について

春合宿の日程については図2に示したとおりである。この、春合宿ではメンバーの卒業式を兼ねており、スタッフの工夫が施された。

IV. 「'94ヨコ体験グループ」の結果

1. 参加状況

1) スタッフとメンバーおよびグループ分け

スタッフの性別と立場の内訳を表3に、メンバーの性別と学年の内訳を表4に示した。スタッフは大学生が17名、教員が6名、その他(バスの運転手、新聞記者、事務員)の3名の合計26名で、メンバーは中学生が7名、高校生が6名の合計13名であった。男子が少ない理由としては、おそらく活動の主権が女子大学にあることが理由と考えられる。メンバー13名の他に、合宿直前まで参加する意志を示していた子どもは、3名いたが合宿当日に体調の不調を訴え、キャンセルになった。

表3 スタッフの内訳

	大学生	教員	その他	計
男		5	2	7
女	17	1	1	19
計	17	6	3	26

表4 メンバーの内訳

	中 学			高 校			計
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
男		1		1	1		3
女	1	4	1	1	2	1	10
計	1	5	1	2	3	1	13

2) メンバー (13人) の事前面接

メンバーの愛称、学年、性別、また、①家

族構成、②不登校の原因、③相談歴および現病歴については表5に示したとおりである。

2. 夏合宿でのメンバーの変化と展開

3泊4日の夏合宿でのメンバーの様子や変化について述べておく。

1) ユーグレナ 行きのバスの中からアラレちゃんと常に一緒に行動し、自ら他のスタッフやメンバーとの関わりを持つとはしない。食事は他のみんなが食べ終わり、片づけが終わっても食べ終わらない程ゆっくりであった。

「ユーグレナ」とは、微生物の名前で生物が好きであることからこの愛称をつけたと言う。2日目のハイキングでもアラレちゃんと一緒に行動し川に入ったりするが集団の中に加わることはない。2日目からは他のスタッフやメンバーとも口をきく様になるが自ら進んで話しかけたりはしない。2日目の夜に体調を崩しているアラレちゃんを介抱するなどの場面が見られ、この時、初めてユーグレナが人に対して積極的な態度を示し、今までとは違った一面を覗かせた。3日目からは笑顔も多く見られるようになるが時々ふーうっと疲れたような暗い表情を見せるときもあった。

2) 智世 面識のあるスタッフの側に居ることが多く、明るい表情で会話をするが、特定のスタッフと一緒にいることが多く、他のスタッフやメンバーと会話することはない。「智世」とは以前から使っていた自分のペンネームだと自己紹介の時に話す。2日目の午後アルバイトがあるので帰らなくてははいけないという理由で2日目に帰る。

3) ピコリン 行きのバスの中では事前面接の時に会っていたうららと一緒にウォークマンを聴いており、比較のおとなしい印象であった。昼食後、気持ちが悪いと言って、別室でみんなとは別に休んでいたが「帰りたい」と言いだし、うららが様子をうかがいに行くと「もう1日頑張ってみる」と言う。うららに「みんなとは合わない、はしゃげない」と不安そうに言っていた。2日目に「やっぱり帰りたい。夏休みの宿題もやってないし、気

表5 メンバーの家族構成と不登校の原因と相談歴・現病歴

愛称	学年	性別	事前面接 (カルテより抜粋)
1 ユーグレナ	高3	女	①父・母・兄(別居)・妹の5人家族 ②高2の1学期から欠席がちになり、完璧主義が原因と思われる。 ③中2の3学期～高2の1学期まではI病院で、高校2年生の2月から現在に至るまでK病院でカウンセリングを受ける。現在は、睡眠薬と精神安定剤を投与。
2 智世	高2	女	①祖母・父・母・妹2人の6人家族 ②中1の2学期から不登校。中2の担任の先生をしたっていたが突然、先生を「バイ菌」と呼んで拒否する。 ③なし
3 ピコリン	高2	女	①母と2人家族。(父は本人が3ヶ月の時に自殺) ②高2の5月中旬に集中力が欠け、A病院でカウンセリングを受け、Drに「1週間休んでみては?」と言われてから学校へ行けなくなった。 ③A病院でカウンセリングを受け、投薬治療を受けている。
4 マック	高1	男	①祖父・父・母・兄の5人家族 ②中2の頃より朝起きられない。中学は卒業したが、高1に万引きの疑いをかけられ登校しなくなる。 ③最近まで、精神科を3カ所通院したことがあった。ドモリの薬を投与していた。
5 のりくん	高1	男	①母・妹の3人家族(父とは別居中で、離婚調停中) ②いじめが原因。自分のトランペットを傷つけられた。 ③なし
6 モロヘイヤ	高1	女	①祖母・父・母・姉の5人家族 ②生まれた時より心臓を患い病院の学校へ小4まで通っていたため ③O病院の精神科に週に1回のカウンセリングを受けている
7 みやちゃん	中3	女	①父・母・妹の4人家族 ②中2にダイエットをする。男の子を好きになった頃より過食気味になる。髪を自分で切ってしまう、おもらしをしてしまう、イライラする、ノイローゼ気味。 ③精神科、K相談室に通っていた。
8 かほちゃん	中2	女	①父・母・弟2人の5人家族 ②中1の2学期に友達と大喧嘩し、3学期から不登校になり、3月から保健室登校し、中2で5限目からの教室登校をする。小学校時、中2でもいじめられる。 ③相談機関を3カ所(時期は違う)通う
9 ちーちゃん	中2	女	①父・母の3人家族 ②中1の11月頃から男の子にいじめられる。(いじめは小5の頃からある) ③なし
10 ハイジ	中2	女	①父・母の3人家族 ②中2の6月に突然、記憶を失う。(母親の顔を見て誰か分からない、自分の名前が分からない、どこの家に居るのか?) 2日で記憶は戻るが、熱が続く。中2の4月に学校へ行きたくないと母親に言う。学校で友達に無視されたりイヤミを言われた。 ③Y病院に通う。
11 ヒロコ	中2	女	①父・母・兄・弟の5人家族 ②友達に万引きを強要され、警察に捕まる。不良グループとの関わりで本人が抜けられない。 ③なし
12 ブロッキー	中2	男	①父・母・兄・姉の5人家族 ②学校の先生への不信任感。 ③なし
13 クララ	中1	女	①母・姉の3人家族(父親は本人が1歳の時病死) ②中学になり2週間のみ登校。小学校の時に蓄膿症で友達に臭いと言われ、中学校では髪の毛が臭いと言われる。友達は信用できないと言う。 ③Yクリニック、K相談所にカウンセリングを受ける。

になってるから帰る」と言ったので「定例会でまた会おうね」とスタッフに見送られ、帰ることになった。

4) マック 合宿に自分のお気に入りのCDを何枚か持参し、一所懸命アーティストの説明をしていた。グループの中では数少ない男子だが自然なユーモアでみんなを笑わせることも多く、グループのムードメーカーになっていった。3日目にブロッキーが部屋に居ないことに気がつき、それまではあまり気にしていなかったブロッキーを「探してくる」といって外へ駆け出していったこともあった。

5) のりくん 合宿にスーパーファミコンを持参し他のメンバーやスタッフとのコミュニケーションとして使っていた。メンバーの女子から人気が高く、いつも女子に囲まれていた印象を受ける。合宿には慣れている様子だがケガを気にしたり、少し潔癖な部分も伺えた。同じ男子のメンバーであるマックやブロッキーと一緒にいるよりも男性スタッフと一緒にいた方が多く見られた。

6) モロヘイヤ 実際の年齢よりも幼い印象で男性スタッフの腕にからまったり、女性スタッフの髪の毛や腕にしながみつような「甘

え」の行動をよくしていた。モロヘイヤを以前から知るスタッフによると、髪の毛を触ってくるのは彼女流の洗礼の儀式みたいなもので、受け入れの合図みたいなものだという。あまり人見知りはしないようで、誰にでも同じ様な振る舞いで話しかける場面が多く見られた。

7) **みやちゃん** 大人っぽいイメージで、言葉づかいも目上に人には敬語を話し、協調性もあり、優等生タイプと言える。3日目の「自由遊び」の時間は頭痛が原因で1日中、部屋で休んでいた。メンバーと話よりもスタッフとの交流が多くもたれていた。

8) **かほちゃん** ミニスカートのワンピースにストレートの髪をおろして女の子らしい印象。メンバーと話よりもスタッフとの会話を中心に、4日目の夜には自分がいじめられた時の話を泣きながらスタッフに話すこともあった。スタッフの中でも特にナンシーの後にくっついて歩き、女性イメージのモデルとして見ていたようである。

9) **ちーちゃん** はきはきとした口調で話し、人の話を聞くよりも自分の話を優先させてしまう。メンバー同士の会話は少なく、話すことがあってもけんか口調になることもあり、スタッフが間にはいることがあったりもした。自分の意見や将来についてきちんとした意見を持っており人に伝えたりする力は充分に持っていると言える。のりくんに対して恋愛感情を持ち始めスタッフに打ち明けたりする姿も見られた。

10) **ハイジ** すぐに誰とでも友達になれるようで、スタッフに積極的に近づいてくる。自分の話になると会話を遠ざけるが人の話には積極的に話してくる。メンバーよりもスタッフと一緒にいることを好んでいるようで、近くにいるスタッフの服や袖につかまっている場面が多く見られた。

11) **ヒロコ** 顔はうつむきかげんで、話すときは目線だけ上げ、表情はあまり変えない。

12) **ブロッキー** 出会いのゲームでもなかなか声を出して話すことをしなかったり、話し

出すのに時間がかかったりした。目線はいつもはずかしそうに下を向いていた。時々、ふーっと散歩に出かけてしまうことがあり慌てて、メンバーやスタッフがブロッキーを探すことも多かった。特に女性のスタッフと口を利くのが苦手なようで話しかけると避けられてしまうこともあった。しかし、彼を心配してやまちは4日間ほとんどブロッキーと一緒に行動していた。

13) **クララ** 少し前屈み姿勢で、顔はまっすぐ向け、話したり、話を聞いたりするときは目だけ動かしあまり表情を変えない。会話も「別に」とか「うん」とかの単語で、どことなく投げやりな印象を与える。

女子のメンバーは比較的メンバー同士のつながりを積極的にもとうとはせずスタッフに「甘え」を見せたり、話し相手として求めてくることが多かったように思われる。男子のメンバーは3人が仲良くしている場面はあまりなく、3人とも単独的な行動が多く見られたように思う。3日目からはマックがブロッキーを気かけはじめ、マックとブロッキーのツーショットは自由時間などになるとよく見られた。

3. 夏合宿での感想文（抜粋）

夏合宿での最終日に4日間をふりかえってメンバーに感想文を書いてもらった。彼らが合宿をどのように体験したのかを知るために、以下にメンバーの感想文の抜粋をかかげることにしたい。

1) **ユージェナ** この合宿に参加する前から少し体調が悪かったこともあって、すぐにバテてしまいそうになったけれど、いままでは頑張れるときにでも全部を放棄してしまうのに、今回は多少うまくいかないことはあっても最後までやり通せたので良かったと思いました。(略)でも、残りが少なくなってくると、せつかく知り合って、友達になった人達と別れるのが嫌だなあと思ったりしています。

2) **智世** 途中で帰宅したため感想文は未提出

3) ピコリン 途中で帰宅したため感想文は未提出

4) マック OK! 楽しかった合宿。まず、この合宿のことをいところから電話で聞かされたときには、なんかイメージ的に嫌な感じをうけた。そして、しぶしぶ岐阜に来ていところのお姉さんからスタッフが女子大生だと聞いて楽しみになりました。そして、合宿当日、スタッフの皆さんが美人ばかりだったんで、これは、楽しくなりそうだと、と思いました。でも岐阜駅の時点では男の参加者が僕しか居なかったんで少々不安でしたが結局、2人参加者が居たので安心しました。最初はみんな、バスの中では、ぎくしゃくした感じで僕も、大丈夫か? と思いました。しかし、いざ、「星の家」に来て、ニックネームをつけたり、いろいろなゲームをしているうちに知らず知らず、みんなが打ち解けあっていて、気軽に話とかしていました。(略)それに2日目のハイキングで川で思いっきり泳いだことも楽しかった。僕も最初は、ジーンズをひざのまで上げてただ足だけ水につかっていたけど、まわりの雰囲気の流れに流されて服を着たまま泳いだときは、なんか気持ちよかった。でも、その後が大変だった。ぬれた服を来て、ハイキングはきつかったけど、歩いているときにゲームをしながら歩いていたのでつかれたけれど盛り上がったから楽しかった。(略)はっきり言って僕はこの合宿に参加して本当に良かったと思う。新たな友達もできたし、初体験のこともいっぱいあったし、本当に“OK!”という感じです。でも僕はA県出身なので、あと一週間もすればA県に戻ってしまいます。もしかすると、もう、このメンバーとは会えないかも知れません。これは、本当に悲しいことです。でも、もし、第2回があるのなら、なんとかしてでも、また、みんなと会いたいと思う。本当に楽しい4日間をありがとう。

5) のりくん (略) 足りない物と言えば水着とエプロンだった。3日目のとき川にはいるときに下着をつけたまま単パンで入ったこと、下着特有の気持ち悪さがあった。それと、食

事を作るときに不便だったのがパジャマと服が汚れるのを気にしたことだった。食事を自分たちで作るという意外性はよかったけど。出会いのゲームの時、2グループに分けて名前を覚えようとしたのは少し人数に対する不安を感じた。でも意外に楽しく名前と顔を覚えられた。それにあまり積極的じゃない人や無口な人も分かってきた。そして気がついたとき、キャンプファイヤーと花火をするときは完全に打ち解けていたような気がした。それにスーパーファミコンはさらに親密になるきっかけになったと思う。でも初日からヒロコちゃん達2人とロゲンカが始まり、僕自身も生意気なことを言っていたようで少し後悔している部分がある。(略)ふりかえりの会ではくまちゃんとアラレちゃんの泣いてしまうなどの気持ちが僕にも少し分かった。何か明るい普段の一面と、もう一面がとも現れていた様な気がする。この作文でもふりかえりでも、まだ僕にはこの合宿のことを表せていないだろう。また、みんなでお話ししたり遊んだりできるのを待ち望んでいる。本当に楽しくて充実した4日間だった。

6) モロヘイヤ 途中で帰宅したため感想文は未提出

7) みやちゃん 私は、いろいろな合宿を体験してきたけれど、今回は、住んでいる場所、年齢の違う人達と自由に行動したことが新鮮でした。初めは何がなんだか全く知らなくて、どうしたらいいかわかんなかったけれど、時の流れにしたがって、どんどん友達が広がって、いっきに仲間が増えた感じがします。偶然ではなく必然的に知り合えたんだという感じがします。料理も、分担通りじゃなく自然に他の班の所へおじゃまして手伝ったりしている自分があるって、不思議でした。この場所に来て空を見上げたとき、こんなにたくさん星があるなんて、夢にも思いませんでした。ふだんの生活の中にも、見えないものが本当はたくさんあるのに、気がついていない大切なことがある様な気がしました。

8) かほちゃん 私はこの合宿に参加してみ

て、とても良かったなあという気がします。最初はものすごく不安だったけど、なんだかスタッフの人たちと話している間に、しらずに友達ができいき、そんな不安なんか吹き飛んでしまいました。そして自分で「なーんだ。やってしまえばできるじゃないか」と心の中で自分に言いました。しかし、やっぱり1日目は緊張するけど2日目からはもう緊張なんか感じませんでした。みんな、川で泳いだとき、みんな笑っていました。そして「ああ、来てよかった。本当によかったよかった」と思い、自分も知らない間ににこにこ笑っていました。

川をちょっとさかのぼっていくとき、みんな手をつないでいるのを見て、ひとつのチームワークができたようで、また、その中に自分が加わっていることが何よりの自信につながると思います。(略)人生のたった4日間でこれだけの友達ができるとは思いませんでした。ちょっと不思議だなあと思いました。生きていて本当に良かったと思います。

9) ちーちゃん (略) 人間関係とかすごく気にしてしまう方なので、みんなと上手くいかなかったらどうしようとか、みんなと仲良くできるかどうかずっと心配してたんだけど、スタッフの人も参加者の人もすごくいい人達ばかりで心配してたことがうそのようにみんなと遊ぶことができ本当に楽しかったし、いい思い出です。キャンプ(合宿)っていうと、マニュアルにそってやるっていうイメージがあるんだけど、この合宿は、一応マニュアルはあるんだけど、とっても自由で、時間にルーズなのが私の合宿に対するイメージを変えてくれました。人間関係のトラブルで学校へ行けなくなって半年が経とうとしているんだけど、夏休みに入った頃から2学期だし行こうかなって思い始めて、でもやっぱりどうしようとか悩んでたんだけど、この合宿に参加できたことで自分に自信がついて、そしてやっぱり人はそれぞれ違う面があるってことを改めて感じる事ができて、明日思い切って学校へ行こうって気になりました。一度

自信をなくすと、とことん落ち込んでしまうので、これからは自分の良い面を探し続けていきたいと思います。そして、友達と接するときもその人の良い面を探していき、もうトラブルで学校へ行けなくなるなんてないようにしたいです。あと中学生生活も1年半、高校へ行き、大学へ行き、社会へみんな出ていく中で、決してレールを踏み外すことは悪いことじゃない。返って自分自身を成長させてくれるものだと思います。私には将来アメリカに留学して翻訳家になるって夢があるんだけど、今までは、なりたいたいけど無理だっていう気持ちがあったんです。でもこの合宿で、自分自身を成長させることができ、何でも成せば成るといってやればできるっていう気持ちになれて、本当に“今から努力して必ず夢を実現するぞ”って思いました。

10) ハイジ 私はこの合宿を家に帰ったら、真空パックで冷凍して、いつでも取り出してながめたいと思った。ぐらいにすごく楽しかった。ハイキングでは川に急にはいることになってちょっと「あつ、どーしよかな」て思いズボンをはぎの上までまくって足だけつかっていた。でもそのうちに加ト吉が服を来たまま泳ぎだしたときはやりたいけど……と引っ込んでみていたら、みんながぞくぞく入り始めたのでやっぱりつられて洋服のまま川で泳いだ。(略)家に帰ったら親や親戚にずうーっと話をしようと思います。

11) ヒロコ 私はこの合宿に来て良かったと思います。それじゃ、最初「星の家」についたときは、なんかみんなが知らない人たちばかりでどうやって話しかければいいか迷いました。はっきり言って「星の家」についたときは何か全くつまなくて来たのが間違いだったかなって思ってたけど1日で友達ができ本当に良かったと思います。(略)本当に本当に来て良かったと思います。

12) ブロッキー 電車の時も集合の場所でも不安が増すばかりでした。集合の場所に行ったときに、自分一人しか中学生の男がいなかったの、さらに不安でしたが、ついたら何

とか成るだろうと強気になったら不安が無くなってとても良かったです。初めは、部屋によくいたけど、ひまな時は本ばかり読んでいたので、ギリシャ神話を10巻と生物の本などを3分の2ぐらい読めてとても楽しかったです。ハイキングの時は左足の親指と真ん中の指が痛くて、山は歩かなかつたが、フットベースボールができてとてもよかったです。夜はやる事が無いので寝るだけでしたが、ここでは、夜の一時くらいまで遊べて良かったが昼間に何度も寝ることがあって毎日の生活のリズムが少しくずれてしまった。長いようでも短い3泊4日でしたがよかったです。ひとみしりのはげしい性格だったのでとけ込むには時間がかかりましたが本当にお世話をしただけ、まことにありがとうございます。

13) クララ 私はこの合宿でいろいろなことを体験したけど、特に良かったと思ったのは新しい友達がいっぱいできたことです。キャンプファイヤーやバーベキュー、ゲーム、みんなと一緒にやれてとてもうれしいし、男の人たちとめったに話をしない私が男の人と話ができたのもこの合宿おかげです。笑ったり、はしゃいだりしてとても楽しかったです。たったひとつ後悔していることがあります。それは、ハイキングの時、私はバスで先に帰ってしまったことです。あの時、帰らなければ良かったなあと考えています。この3泊4日、本当に楽しかったです。また、この合宿があったら参加したいです。それで積極的になりたいと思っています。

メンバーのほとんどが書いていた2日目のハイキングでの川遊びだが、メンバーにとってはこの合宿のメインイベントとして思い出になったようである。また、川に入らなかったメンバーも後悔しているようで、服のまま川に飛び込むといった、突然のハプニングの衝撃はメンバーにとって新鮮だったのだろう。そして、偶然の出会いが必然の絆であったかのように関係が深まっていく中で、自分の存在や人と人とのかかわりの意味を改めて確認

したようであった。

4. 定例会から終結までのメンバーの変化と展開

夏合宿後、定例会へのメンバーの参加状況は、積極的に参加する「継続タイプ」、夏合宿後しばらく連絡はないが最後の方で参加し始めた「復帰タイプ」、夏合宿後は定例会には参加しなくなってしまった「断絶タイプ」の3つに分かれた。定例会のお知らせは、夏合宿に参加したメンバー全員に、毎回、郵送や電話で連絡し、定例会に欠席したメンバーには、報告としてメンバーとスタッフが報告書を作成し郵送していた。これは、先に述べた3つに別れたメンバーに夏合宿から始まったスタッフやメンバーとの「出会い」から「別れ」までの時間を一緒に感じて、かかわっていきたいという願いからであった。

春合宿後の時点で学校へ通っているメンバーは13人中9人で、1人は就職した。もともと、このグループはメンバーをただちに学校に戻すことのみを目的とはしていなかったが結果的に、約77%が学校へ通えるようになったことは喜ばしくもあり、スタッフも力づけられた事実であった。こうして、われわれはメンバーとのかかわりの中で、メンバーの心の中に、かなり大きなポジティブな方向での変化を生み出させたということができよう。

次に夏合宿後の定例会から終結までの個々のメンバーの様子を述べておく。

1) ユーグレナ 心的状態が表情や体調に表出される場合が多く、定例会では必ずと言っていいほど帰り際になると体調の不調を訴えたりする場合が多く見られた。しかしながら、春合宿では特に変化は見られず調子良く、2日間を無事に過ごせた。高校へは夏合宿後、通いはじめ、高校を無事卒業し、4月以降は大学受験のため浪人中である。

2) 智世 夏合宿後の定例会は1度も参加しなかったが、4月以降は通信制の高校へ通うことになった。

3) **ピコリン** 夏合宿後の定例会には顔を見せなかったが、スタッフの年賀状がきっかけとなったのか、1月の定例会から参加し、スタッフを中心に一緒に行動していた。人前で話すことはなく、おとなしい印象だったが、春合宿ではハイジとショートコントをみんなの前で披露してみんなを驚かせた。また、ユーグレナに「今まで喋ったことなかったから、いっぱい喋ろうね」との会話もきかれ、積極的にメンバーとも交流していた。

4) **マック** 夏合宿のふりかえりで「僕は郷里へ帰るのでもう会えない」と言っていたが、再会ミーティングとクリスマス会には参加した。クリスマス会の時に、突然「高校生活をやり直して、もう一度高校へ行きたいです」とみんなに宣言し驚かせた。その後、高校は自主的に辞め、会社に就職し働き始めている。

5) **のりくん** 定例会では男性スタッフとの交流が中心で、自分のペースを守りながら、自分からメンバーやスタッフへ積極的に話しかける場面は見られなかった。

6) **モロヘイヤ** 夏合宿後は定例会には一度も参加していないが、スタッフがかかる電話や手紙に対しては明るく、返事を返してくれていた。4月以降は通信制の高校へ通っている。

7) **みやちゃん** 夏合宿の時の、お姉さんっぽい、おすました様な表情とは違って、年相応の表情が見られるようになった。夏合宿後は再会ミーティングと春合宿のみの参加であったが、高校受験で希望していた学校に合格したためか生き生きとした表情を見せた。4月以降は高校へ通っている。

8) **かほちゃん** 定例会ではメンバーよりもスタッフと一緒にいることが多く、大人びた会話を楽しんでた。会話の内容はオシャレや結婚、出産などについてで、スタッフと同等に話す事が多い。時々、自分がいじめられていた話をスタッフやメンバーに淡々と話すこともあったが、他人の話をしているような感じだった。4月以降は中学校へ通い始めている。

9) **ちーちゃん** 夏合宿時にスタッフのほとんどが感じていた、私の強さや表情のきつさが無くなり、定例会を重ねる度に柔らかくなり、人の話を聞けるようになっていった。春合宿では、ブロッキーを励ましたり、声をかけたりするなどメンバーへのアプローチも積極的に成されていた。4月以降は学校へ通い始めている。

10) **ハイジ** 夏合宿から定例会にかけて特に大きな変化は見られなかった。メンバーとの交流よりもスタッフとの交流の方が多く、女性スタッフの腕や袖をつかんだり、髪を触ったり「甘え」が多く見られた。夏合宿では一方的に話す場面がよく見られたが、話している相手について関心や興味を持ち始め、話しの輪を作れるようになってきた。

11) **ヒロコ** 夏合宿の時に見られた単独行動や、反発的な態度は定例会を重ねるごとに無くなり、スタッフに素直に依存する場面も見られた。また、表情のきつさや暗さは少しずつ無くなり、柔らかな表情、笑顔もよく見られるようになった。自主的な行動も少なかったが、「～したい」、「～やりたい」とスタッフに言えるようになり、行動的になったと言える。春合宿では他のメンバーを気遣ったり、スタッフを誘ったりと積極的な一面も見せた。

12) **ブロッキー** 夏合宿の時と同じように口数は少ないが、定例会には毎回参加していた。また、ブロッキーが水族館での担当責任者であった時は、常にスタッフやメンバーの人数を数えたり、先頭を歩いてみんなを誘導したりと積極的に責任感の強さを発揮した。春合宿では、カラオケで自分からマイクを持って歌ったり、スタッフと一緒に踊りだしたりして、スタッフを驚かせた。

13) **クララ** 夏合宿後は参加していないが、スタッフが電話をすると明るい対応をしていた。また、夏合宿で仲良くなったヒロコとも時々連絡をとっているようであった。

5. スタッフのレポート「1年間の活動をふりかえって」

今回、この活動にあたり、ほとんどのスタッフが初心者であった。約1年間の活動を通して成長や変化があったのはメンバーだけではなく、スタッフも同じであった。次にこの点をうかがわせる1年間の活動をふりかえりまとめたスタッフのレポートをいくつか紹介しておきたい。

1) アラレちゃん (22歳)

「ユーグレナとのかかわり」

夏合宿の時、ユーグレナは人に慣れるのに時間がかかるタイプで、なかなかスタッフにすら打ち明けるのが遅かった。が、たまたま私には何とか打ち解けてくれるような感じになった。しかし、いつまでたってもそれ以上の進歩がないようにも思えた。また、いつまでも私以外に打ち解けていないのを見て「このままでいいのだろうか」という不安が出てきはしたが、そのユーグレナも2日目に大きな変化が現れた。ハイキングの前に川遊びをした。川に入る前には「向こう岸に行ってみよう」と言っていたものの、川に入るのをためらっていた。メンバーが次々に入るのを見て、彼女も川に入っていった。思いきり遊んだようだった。後から私が彼女に近寄って「向こう岸に行ってみようか？」と声をかけると嬉しそうに「そうだね」と答え、対岸まで行く気になった。達成感が残ればいいと私は考えていた。また、この対岸では「記念に石を持ち帰ろう」という提案をした。合宿が終わってからも、この石を見ることによって、達成感もより強化されるし思い出も残る。また、たまたま見つけた同じ種類の石をお互いに持って帰ることにしたのだが、私との仲間意識を持たせたかった。その後、ハイキングになって、ユーグレナの心も安定したのか私から離れて他のスタッフとのコミュニケーションがとれていくようになり、笑顔がどんどん増えていった。

2) サヤ (21歳)

「不登校生徒とかかわった経験について」

自分自身不登校児とかかわるのが初めてで、最初はどうか対処して良いのやら、相手をどう見れば良いのやら分からないという気持ちでした。新しい友達と出会う時と同じなのかも知れないけれど、ほとんど話しをしない子や側によるだけで逃げていってしまう子を見て、緊張感が伝わり私自身すごく不安になり、これから先どう接していったらいいのだろうかと思いついてしまったところがあった。ただこれは、不登校児の方が逆に他の人たちよりストレートに態度で表現しているのかもしれないと思った。幸いなことに個人対個人ではなく、グループでの活動だったため、誰かしらが上手くかかわれたように思う。不登校をしている、もしくは、せざるを得ない子どもは①個人内要因（遺伝的気質、身体発達、人格発達上の諸問題）、②家族要因（親子関係、兄弟姉妹関係）、③学校要因（対教師関係、対友人関係、学校の風土など）、④社会要因（政治・経済的状況、地域社会の風土、交通問題など）の要因の相互作用の結果、学校に行けないなどと言われているが、社会性の問題、劣等感や自己評価の低さ、親子の愛情問題、また、今の学校社会が持つ学業偏重や管理体制の中で自己の問題を抱え、どうにもならないような状態に陥ってしまっていることが体験的に分かった。また、これらの問題をどうとらえてメンバーと一緒に考えていくかが大きな悩みとなった。これには、共感的理解を心がけると同時に素直に自分を表現していくことを心がけるしかできなかった。ただ、純粹に私自身がメンバーとの出会いを大切に、楽しめたように思う。

「私が得たもの」

ヨコ体験グループを通して自分自身と向き合う機会を持てたと思う。不登校児と会うときの心構えとして「自然体で接する」があったのだが、私自身人と接する時に壁を作ってしまったたり、逆に寄り掛かりすぎてしまったりと自然体でいることがとても難しかった。また、不登校児の悩みを一緒に考えているとき、自分の中学・高校時代の家族関係・友人

関係や考えていたことなどを振り返り、自己理解の手助けとなったように思う。他のスタッフとの活動を通して、同じ目的を持った仲間と同じ時を持てたことが良かったと思う。他のスタッフのメンバーへの接し方やグループでの活躍を見て、自信をなくしてしまったこともあったが、人はそれぞれに個性があり、表現の仕方や行動に違いがあるからこそ、このグループでも集団力動が働いたのかも知れないと思った。「百聞は一見にしかず」という諺の通り、自らが経験することによって「知る」ということは大きかった。この活動が臨床的経験の第一歩となったように思う。それと同時にまだまだ本当にはじめの段階であると実感した。これからもっと臨床の基本的態度を学んで実践していきたいと思った。

3) ウーフ (21歳)

合宿(夏合宿)前は、メンバーにとって、「優しいお姉さん」のようでいいのだと、とりあえず、心理臨床の専門性とか、そういうことは頭の隅っこにでも置いて、という気持ちだったのが定例会を重ねていくうちに、やっぱりそれで良かったのか、という疑問のようなものが湧いてくるようになっていました。(略)そのままの自分でメンバーとつき合いたい、また、自分自身に臨床家としての目も養いたいという、私にとっては矛盾するようなあり方に挟まれて、どうあることが一番ベストなのか悩みました。改めて、今、そのことについて考えると、前よりはすっきりしたように思います。というのは、どのようにあることが正しいと一言で言えるようなものではないということ、結局、通らなくてはならない道(悩み)で、そこを歩くことに意味があるのだと思っています。実際、この一年で学んだこと、得られたことは、人に伝えるには私の言葉や表現力では足りなくて、もどかしくなる程のものです。スタッフとして、臨床家として、メンバーとかかわるといったものではなく、そういう立場を越えて、ただの一人と一人としてつき合える、向き合うことの大切さを知ることのできた場、そういう

グループだったと思います。私は春合宿での卒業式の送辞で「これまでみんなが見せてくれた笑顔や勇気、優しさは私たちスタッフにとって心の支えとなってくれていたし、これからもそうあり続けるでしょう」と言いました。本当にそんな気持ちでいっぱいでした。グループの中で私たちだけが何かをしてあげたのではなく、反対に、メンバーの子たちから沢山のものを貰っていたような気がします。人と人がかかわっていくという時に、片方だけが与える、片方はして貰うというのは、どんな立場の者同士でもありえないことなんだと身をもって知りました。また、受け入れること、受容することを常に思っていたのですが、逆に言うと私自身がメンバーに、スタッフに受け入れられていたからこそ、こんな風に良かったと思える体験ができ、このグループの居心地の良さを感じていたのだらうと思います。

4) なおなお (20歳)

「自分自身について考えたこと」

私はこの活動に参加した当初、どうメンバーとかかわっていけばいいのか、どう心を開かせるか悩んでいたが、日を重ねるうちに「自分は臨床的な知識も経験も全くないのだから自然体で居ればいい」と考えるようになった。しかしその後、自然体で居ること、自分を素直に出すことは私にとって困難なことであり、それはしっかりした自己概念や考え方を持っていないからだということに気づいた。メンバーの一人が私に積極的に近づいてきたときも、感じていることを話してくれた時も私は自然体で居ることができないために混乱し、相手の心の中に踏み込んで行くことができずに、上っすべりなコミュニケーションしかとることができなかった。そのことで、スタッフとしてメンバーを観る立場の私が、自分を素直に出して正面からメンバーと向き合っているように思える他のスタッフやメンバーを通して自分自身の内面に目を向けることができた。

「メンバーについて考えたこと」

メンバーと一年間の活動を共にしてきて強く感じたのはその変化の速さと個性性だった。夏合宿の頃は攻撃的であったり、無反応であったりして、その子の表面的な反応の仕方しか見ることができず、壁のようなものを感じたが、会う度に表情や感情表現が多彩になり、一人一人違うコミュニケーションの取り方と豊かな内面を見せてくれた。一見、同じに見られがちの不登校という問題についても原因や対処の仕方は同じものなどなく、そのため、一人一人としっかり、向き合っていく必要があると思った。

「得られたこと」

一つは自分の欠けている部分に気づき、人間的に成長するためにクリアしなければならない課題を見つけられたこと。もう一つは相手の本当の姿を見るためには偏見や先入観を持たずに相手を真正面から向き合う必要があると気づいたこと。この二つがヨコ体験グループ活動を通して私が得られた主なものである。これからは、このことをしっかりと自分の肉として、今後、臨床心理を学んでいく上で役立てたいと思う。

5) うらら (20歳)

「臨床経験として」

この活動は不登校の子どもの弱い部分である「ヨコ」の体験をスタッフを通して類似体験させることが目的であったが、集団療法を用いた、この活動に参加するにあたっては相当悩み、考えたが、いざ参加してしてみるまでにはわからない「未知なるもの」であったため、これも経験の一つとして参加することにした。夏合宿に始まり、不登校の子ども達の様々なケースを目のあたりにして、まず思ったのは想像していたよりも普通の子が多くて、一見どこに問題があるのか分からない子どもが多いということ。して、それでいて、目が曇っていて、内にいろんな悩みを秘めているんだろうということだった。夏合宿では、それほどメンバー同士の交流もないまま終わってしまい、その後始まった定例会で少しずつ交流もでき、また、悩みの打ち明け話も少し

ずつ出てきた。このような場合に、どうやって答えて良いのか分からずにメンバーとの距離のとり方に戸惑った。やはり、メンバーとスタッフとの一定の距離を保つことは大切でありあまり深入りするとメンバーとの間に、また新たなトラブルも生じるだろうし、メンバーに「甘え」が出て、それが定着するとこの活動以外の場にいけなくなるだろうし、私たちの活動位置はあくまで、ヨコ体験の類似的役割であらねばならないということであった。

「自分自身にとって」

この活動での体験は、私自身を大きく変えた。まず第一に、自分という者のあり方や、今まで否定していた部分を見つめるきっかけとなり子ども達と接することで自分の位置を確かめるようになった。「この子にとっては、こういう風に接する」などの対応の仕方も考え、その時、受容するにはそれだけの度量を必要とされるので自分を受け入れ、その上で子どもを受け入れなければならないことに気づき、そのことで一回り大きくなれた。また、このような場面に参加でき、将来の自分の展望を見据え、「絶対になろう」という意欲を持つきっかけとなった。また、子ども達から学ぶことも多く、あらゆる面において、良い刺激を受け、また、他のスタッフとの交流で同じ道を目指す者が居ることを知り支えとなった。

「今後への課題」

良い経験ではあったが、決して全てが良かったとは思わない。まず反省しなければならないのは、スタッフの勉強不足や情報交換の不徹底だろう。色々な場面にそれぞれのスタッフは対応してきたが、それをみんなの前で発表し、反省する機会は少なく、アプローチの仕方が重なったりしてしまっていて、あまり進展がスムーズではなかったからである。そのため事前勉強は、もっともっとした方が良さだろうし、集団療法の意義を押さえて、効力、効率を上げなければならない。また、スタッフとメンバーが密になりすぎず、もっと早い時期からメンバー同士の交流を望める機

会を作らなければならないだろう。

6) セバスチャン (20歳)

「反省」

夏合宿から春合宿までいろいろなことがあり、出会いがあった。全てのことについて私自身は為になったことばかりで、逆に嫌だと思ったことや忘れてしまいことなどは一つもなかったように思う。しかし、だからといって反省すべき事が一つもないわけではない。むしろ、反省すべき点の方が、やって良かったと思ったことよりも多いように思うのだ。この反省点を上げて、1年を振り返ってみたい。まず、最初に「いじめ」や「いじめられっ子」についての認識が甘かったこと。次にスタッフたちが本当に自分たちの立場を理解していたかと考えると多少疑問が残るという点だ。夏合宿後に始まる定例会もみんな、意欲的に参加したという点では確かにスタッフとしての役割を果たしていただろう。また、突然いじめられていたことを話されても上手く対処したり、つかず離れずの関係も、まあまあ保っていたし、途中から情報交換もなかなか多くなったように思う。しかし、レポートの提出など、スタッフの義務の徹底があまりされていなかったのではないか。夏合宿においてもスタッフのミーティングは必要だったのではないか。今回はこのあたりについても検討していきたい。3つ目はスタッフの意図的な行動が少なかったという事である。もちろん、意図的にやらなくても自然に振る舞って、それが良い方向へ行けばそれに越したことはないが、こういうグループの活動は、ある意味で不自然なのは当たり前だと思うのだ。あの子にはこう接して、この子にはこう接するといった事も大まかに話し合ったりするのも良い事だと思う。また、「ヨコ体験」というくらいだからメンバー同士のつながりも重視すべきだ。実は、春合宿までメンバーにはあまりつながりはなく、私たちとの斜めの関係しかないメンバーもいた。このことはみんなも気にしていたので私たちは春合宿の時、まず最初に電車に乗るときから何気にメ

ンバー同士を座らせるよう仕組んだ。我々スタッフはサッサと固まって乗ってしまえば一緒に座らざるを得ない。初めのうちは話しをしなかったが、そのうち、「今まで話さなかったよね」「たくさん話そう」といった自主的な言動が目立つようになった。もしかしたら我々の意図に気づくのかも知れないが、時期さえ間違わなかったら必ず成功すると思う。そのためにも、スタッフは密に連絡を取り合い、そろそろ良いだろうという時期を確認していくのも良いと思う。これができれば、どうしようかと悩んだまま時間だけが過ぎていくようなこともなかったと思うのだ。やはり、私たちからの働きかけが最初には必要ではなからうか？(略) 私たちは、あまりにも知識不足だったのではないだろうか。(略)

V. まとめと今後の課題

本学で実践された「'94ヨコ体験グループ」は、以上のメンバーの感想文やスタッフのレポートから明らかなように、当初の目標に沿った成果をあげることができた。事故や特別の困難もなく、無事1クールの活動を終了できたこと自体、ありがたいことであった。この一応の終結段階で、全参加者の寄稿になる文集も刊行された。これも参照いただければ、このグループ活動がメンバーとスタッフ双方にとって持つ意味の重みがさらに感じ取っていただけるものと思う。

本稿では、主にメンバーやスタッフの生の言葉をかかげることで活動の全体を描こうとした。この段階では、本学でこのようなグループ・アプローチの実践が実施できうるかが重要問題であった。そして、それは過去数年に積み重ねられたノウ・ハウの応用であってみれば、ここでは新たな理論化や抽象化の方向での探求ではなく、もう一つの具体例の記述として、できるだけあるがままに記録しておくことに意味があると考えられた。

この中で、今後に残された課題も明確化されてきた。そもそも、このように大学におい

て臨床実践活動を行うことの意義は三重にある。すなわち①臨床実践（不登校生徒への援助、彼らが現在の窮状を乗り越え、人間的に成長していけるよう、適切な人間関係の場を提供すること）、②教育訓練（学生が心理臨床の基本的な考え方と技法を経験的に身につけること）、③研究（①②のさらなる展開のために実践され経験された知見を積み重ね、体系化、普遍化すること）である。スタッフのレポートが語っている反省と展望は、結局のところ、これら三本柱のすべてに関して、より本格的な、より内実の豊かな活動へと深化させていきたいということに収斂する。「遊戯療法の発達段階論」でいえば、われわれのこの段階は、もっとも初期の「情熱と体力で治す段階」だったといえよう。これを次の「専門的技法の段階」へとどう進めていけるのかが、要するに今後の問題なのである。

そのためにもっとも重要なことは、今回は池田研究室主催といういわば個人的な取り組みであったが、今後はこれを公式に位置づけること、すなわち本学心理教育相談室が独自で行う正規の臨床実践活動とする必要があるということである。平成7年度はそのような基本線で展開することになったが、その詳細は次の第二報告にゆずることになる。

〔註〕

* 本報告の概要は、東海心理学会第44回大会(1995、愛知県立大学)において発表された。

1) 東海女子大学心理教育相談室